

19世紀フランス美術とアルゼンチン美術

アルゼンチン



エドヴァール・マネが書いたコピー

'90年11月16日(金)〜12月20日(木)

開館／午前9時〜午後5時 月曜日は休館(初日は10時よりオープン、金曜日は7時まで)
入場料／一般900円・高・大生600円・小・中生300円(前売り・団体20名以上は2割引)

主催／高松市美術館・アルゼンチン共和国文化庁・毎日新聞社・山陽放送

後援／外務省・文化庁・アルゼンチン大使館 協力／ルフトハンザドイツ航空

国立美術館展

高松市美術館



エドガー・ドガ 《踊るアルルカン》



クロード・モネ 《シヴェルニーのセーヌの岸辺》



ラファエル・コラン 《花月》



アントワーヌ・ブールデル 《雄弁》

アルゼンチン国立美術館展

アルゼンチン共和国の首都ブエノスアイレスは、19世紀末パリ風の町並みを残すことから「南米のパリ」と呼ばれる美しい街です。市内にある国立美術館は1896年の設立で、およそ1万平方メートルの展示スペースと約1万点の収蔵作品を擁しています。今回の展覧会では、その中でも特に19世紀の作品に焦点を絞り、フランスに関係した美術と、同時代のアルゼンチン芸術家たちの作品計70点を紹介します。

フランス美術では、印象派の先駆けとなったコロー、クールベ、ミレー、印象派への道を開いたマネ、それに続くモネ、ピサロ、ルノワール、シスレー、ドガ、後期印象派のゴッガン、またロートレックやルドン。伝統的な手法に徹したコラン、ルミレットらアカデミズム系の作家たち。彫刻ではロダン、ブールデルなどの作品50点を展示します。

一方、1816年の独立後もイタリアやフランスで学ぶことの多かったアルゼンチンの芸術家たちは、ヨーロッパの新しい美術潮流の大きな影響下でアイデンティティーに目覚め、独自性を巡って苦闘した歴史を持ちました。その姿はわが国の明治期の作家たちの足跡を連想させずにはおきません。

この2つの美術を並べて見ることによって、本展覧会はわたしたち日本の美術を再考する絶好の機会にもなることでしょう。

●講演会

《アルゼンチン国立美術館の収蔵庫から》

— 知られざる19世紀
フランス絵画コレクション —

講師：谷田博幸（滋賀大学助教授）
11月18日(日)午後1時30分より講堂にて

●次回の展覧会

《石橋美術館名作展》

— 青木繁と日本近代洋画の流れ —

1月11日(金)～2月11日(月・祝)